

第6章 まとめ

第1節 三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について

伊勢貝遺跡の今回の調査において、P70やSE1から弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土したが、三田市域においてはその時期の詳細な編年が未確立の状況にある。かつて、川除遺跡において細分がおこなわれた（高瀬 1992）が、川除遺跡の一部分に限られていたことから、ここでは三田市域の弥生後期末～古墳時代前期の土器変遷について概観し、伊勢貝遺跡出土土器の編年的位置づけをおこなう。

後期後半第2段階 貴志遺跡（岸本2010a）や下深田遺跡Ⅰ区土壇（坑）（岸本・久保2010b）出土の甕や三輪・宮ノ越遺跡竪穴住居1（中井・田中ほか1998）の一括資料を指標とする。

後期後半第3段階 弥生時代後期の最終末で、川除遺跡Ⅰ区SH06・Ⅰ区SK24・Ⅲ区SH52出土一括資料（山田・甲斐・高瀬 1992）を指標とし、さらにこれらの順の変化があるものとみられる。川除遺跡編年案の川除4期から5期にあたるが、Ⅲ区SH52の土器群は川除3期とされていたものである。なお、十倉遺跡北A住居跡床面出土資料は川除Ⅰ区SK24と併行時期にあると判断できる。

庄内期（古）段階 やや時期幅があるものの、桑原遺跡竪穴住居跡1出土土器群（吉田・深井ほか1986）を指標とする。川除遺跡では甕の底部や体部下半の形態において5期と6期では変化が激しいことから、それらの間に位置づけられる。高次・北ノ垣内遺跡SD201古相土器群（岸本2010b）や上井沢・小屋垣内遺跡SB1床面土器（岸本・久保2010a）もこの段階に含まれる。

庄内期（新）段階 川除6期にあたり、川除遺跡Ⅰ区SH28・Ⅰ区SK26出土土器群を指標とし、三輪・宮ノ越遺跡竪穴住居2出土土器（中井・田中ほか1998）もこの時期である。

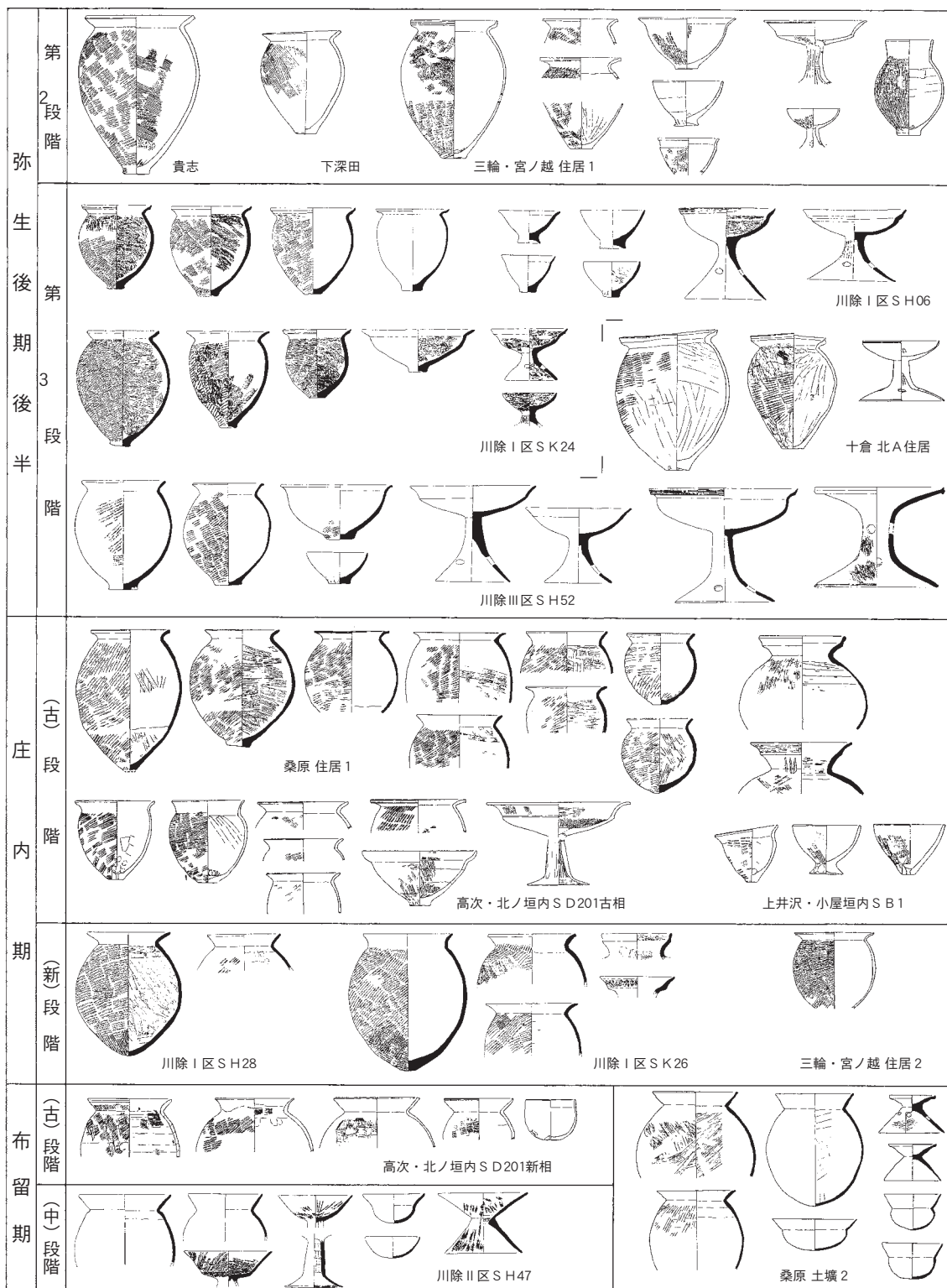
布留期（古）段階 良好な資料に恵まれないが、高次・北ノ垣内遺跡SD201新相土器群（岸本2010b）を指標とする。また、次の布留期（中）段階も含めた資料として、桑原遺跡土壇（坑）2出土土器群をあげることができるであろう。

布留期（中）段階 この段階の資料としては、川除7期とされた川除遺跡Ⅱ区SH47出土土器群をあげておきたい。小型器台の形態により、西村氏（西村2011）の布留式古段階の新相から中段階の古相に位置づけておきたい。

なお、これらの変遷の指標については紙数のため割愛するが、端的には甕の球胴化と尖底化につきる。

伊勢貝遺跡のP70およびSE1出土甕のうち27を除くと、外面がタタキ成形で頸部があまり屈曲せず口縁端部を丸くおさめるタイプであり、これらは弥生時代後期後半より出現し、しだいに多数を占めるようになって布留式段階で消失していく。P70出土の28・29は時期幅を有するが、27の甕は高次・北ノ垣内遺跡SD201古相資料の中に頸部が鋭く外反する形態的類似例があり、体部のタタキとハケの違いがあることから、庄内期（新）段階から布留期（古）段階に位置づけておきたい。

SE1出土土器は口縁部のみの資料であり時期の限定は難しいが、庄内期と判断しておく。可能性としては（古）段階に位置づけできるようである。



第7図 三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器変遷 (1:12)

[参考文献]

岸本一宏 2010a「貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡」『三田市史』第8巻考古編 三田市

岸本一宏 2010b「高次・北ノ垣内遺跡」『三田市史』第8巻考古編 三田市

岸本一宏 2010c「十倉遺跡」『三田市史』第8巻考古編 三田市

岸本一宏・久保弘幸 2010a「上井沢・小屋垣内遺跡」『三田市史』第8巻考古編 三田市

岸本一宏・久保弘幸 2010b「下深田遺跡」『三田市史』第8巻考古編 三田市

高瀬一嘉 1992「弥生時代～古墳時代の土器」『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告 第104冊 兵庫県教育委員会

中井秀樹・田中賢人ほか 1998『三輪・宮ノ越遺跡』三田市文化財調査報告書 第14冊 三田市教育委員会

西村 歩 2011「土師器の編年③近畿」『古墳時代の考古学』1 古墳時代史の枠組み 同成社

山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉 1992『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告 第104冊 兵庫県教育委員会

吉田 昇・深井明比古ほか 1986『桑原遺跡』兵庫県文化財調査報告 第37冊 兵庫県教育委員会